

第三講 ギリシア史の構造と言説的構成

ギリシア史における二つの世界

「暗黒時代という長いトンネルを挟んで二つの世界がある」（周藤芳幸）

ひとつはアイスキュロスやソフォクレス、フェイディアスやプラクシテレス、ソクラテスやプラトンに代表される光り輝く世界がそれであり、

今ひとつはホメロスに詠われる英雄たちの世界である。

一方の世界はポリスという都市国家を舞台に展開され、ヘロドトスやトゥキュディデスによってその歴史がつづられる。

もう一方の世界はシュリーマンによる発掘によってその存在が明らかにされ、ポリスとは違った国家社会の許にあったと考えられる。

学問的方法の違い

一方は古典文献を基礎に研究が進められ、もう一方は考古学の発掘によって研究されてきている。

近代西欧の眼差し

一方は近代西欧文化の母胎として評価され、その独創性と先進性が強調されるのに対して、他方は東方の先進文化を受け入れ、北方からの民族移動によって住民が刷新された。

一方は創造力にあふれた世界であり、他方は創造力に欠け、他者を模倣するだけの世界であったと低く評価されるのである。

創造力に欠けるもう一方の世界は絶えず北方から侵入を繰り返す「健全な野蛮人」によってその退廃から救い出されてきたのである。

discours（言説）：政治的な支配、民族的な優越などを意識的或いは無意識的に肯定する教義

- (1) 新しい文化の創造源はヨーロッパの北部
- (2) アルプスの南、ギリシア正教やカトリックの地に新しい文化を創造する能力があるはずがなく、これらの地の住民は常に外部から侵入してきた北方の移住民によって征服され、彼らによってもたらされる新文化を受け入れるだけである。
- (3) 印欧語族の居住地はヨーロッパ以外の地、ウクライナや南ロシアの草原地帯

にあり、そこで分化して各地に拡散していった。

(4) 北欧にこそ若くて荒々しく創造力に満ちた蛮族（遊牧民）が居り、道徳的に退廃し肉体的に脆弱な南方の住民を征服し、文化の刷新と道徳の再建に寄与してきた。

(5) 古代末期のゲルマン民族の大移動のイメージで語られる。

ドイツやイギリス、フランスなどの西欧諸国による南欧、オスマントルコ支配下の東欧支配の言説の背景を構成してきた。

古代ギリシア人自身の民族移動の伝承の存在

英雄たちの移住：ペロプス一族の移住、カドモスの移住（イオの兄、フェニキアから竜の歯より生じた一族を率いて）、アトレウス家の移住（殺人を犯して蟻の汚れを逃れる為にエジプトから移住）、ヘラクレス家の移住、エトルリア人の移住（テュルセノイ）など。

アテナイを除いて土地からの生え抜きという神話（アッティカの祖、ケクロプスは下半身がヘビの姿をした英雄神）ではなく、移住による入植の神話を持っている。

ギリシア語の方言群の空間的分布に関する言語学的研究（19世紀に盛んになる）

東方方言群：アッティカからエーゲ海、さらには小アジアの沿岸、キプロスに分布。

イオニア方言、キプロス方言、アルカディア方言など

アルカディア方言とキプロス方言の言語的近さ。

西方方言群：ギリシア北部からペロポネソス、クレタ、小アジア沿岸に分布。

アイオリス方言、北西ギリシア語方言、ドーリス方言など。

ドーリス人の移動と、それに伴うイオニア人、アカイア人、アルカディア人の移動の神話伝承の存在。

ホメロスの作品ではトロイに遠征したギリシア軍はアカイア人と呼ばれている。

古典学説の形成：バルカン半島の北部或いはウクライナの草原地帯にいたギリシア語の母集団から方言分化した集団が、幾つかの異なった時代にバルカン半島を南下し、南のギリシアの地に侵入して現地住民を征服し、自分たちの文化と言葉をギリシアにもたらした。

パウル・クレッチマー（P. Kretschmer）の説：“Die Vorgriechischen Sprach- und Volksschichten”, *Glotta* 28(1940), 231-78; *Glotta* 30(1943), 84-218.

ギリシア語が本来持たない語尾（-nthos や-ssos）を持つ地名、人物名に着目。
コリントスやクノッソスなどの地名。ヒュアキントスやナルキッソス（何れもギリシア人が持ち込んできた神々の従者で、死んだ神）などの古い神々の名前。
ギリシア人がギリシアの地にやってくる前には-nthos や-ssos の語尾を名詞に持つ先住民がいた。彼らはその後やってきたギリシア人に征服され、同化する中で民族としてのまとまりを失ってしまったが、地名などにその痕跡を残した。

前 2000 年頃：イオニア方言を話す人々が移住＞ミニュアス式土器に代表される中期青銅器文化をもたらす。

前 1600 年頃：アカイア方言を話す人々が移住＞ミケーネ文明をもたらす。

前 1200 年頃：ドーリス方言を話す人々が移住＞ミケーネ文明の破壊と鉄器並びに火葬文化をもたらす。

イオニア人の逃避：メッセニアのピュロスからアッティカへ、アッティカから小アジアの沿岸へ。

アカイア方言を話す人々の逃避：ペロポネソス各地からアルカディアへ、或いはペロポネソス北部のアカイア地方へと逃避。＞この頃からアルカディアやアカイアにミケーネ式の土器が出現。

アルカディアからキプロスへ一部の人々の移住＞アルカディア方言とキプロス方言の近似。

古典期の方言群の分布とその当時知られていた考古学的事実との整合性から、定説化する。

その後の修正：考古学的知見の増大

1950 年代のカスキーによるレルナの発掘：前 2150 年頃にタイルの家を含む破壊層の存在。＞ギリシア人の移住を 150 年程溯らせる。

エジプトのメディネト・ハブの葬祭殿に描かれている「海の民」の記録：メルネプタハ王の末年とラムセス 3 世の治世の初め。＞イリュリア人の大移動

テッサリアのセスクロで土器発掘：前 5000 年頃に農耕文化

テッサリアのディミニで土器発掘：前 4000 年頃の農耕文化

前 5000 年頃、東方から農耕牧畜文化の伝播＞セスクロ文化

前 4000 年頃、東方から新しい農耕民の移住＞ディミニ文化

前 3000 年頃、東方から青銅器文化の伝播（小アジアから）

前 2150 年頃、北方からギリシア人の侵入、前期ヘラディック文化の破壊と中期ヘラディック文化（ミニュアス式土器）

前 1200 年頃、イリュリア系の人々の通過＞ミケーネ文明の滅亡

前 1150 年頃、ドーリス人の南下とイオニア系の人々の逃避＞鉄器時代への移行

今日では

考古学：新石器時代～青銅器時代～鉄器時代にかけて主要な遺跡の文化層は断絶していない。中心地は何時の時代でも人々の集まるところであったし、聖所は何時の時代でも聖所として人々に崇められていた（アミュクライのキュリアキの丘）。

土器層の変化も破壊層以前の時期にプロトタイプが現れているし、破壊層の後にも以前の土器が出現している。

鉄器は青銅器時代に既に貴金属としてギリシア本土に現れていたし、武器としては東方の島に既に導入されていた。

火葬も絶対的ではなく、時代と社会層の違いによる流行があり、一概に断定できない。
言語学：青銅器時代の末期までギリシア語の方言分化は認められない＝コイナー（標準語）

方言群分化は鉄器時代に入ってから

青銅器時代後期における音韻変化

powoidan(original)

poteidan(Dorian)

poseidan(Linear B)

poseidon(Ionian)

w → t → s

W 音の脱落

korwos(Linear B)

korwos(Dorian)

kouros(Ionian)

w の脱落と o の ou への音韻変化

korwa(Linear B)

korwa(Dorian)

kore(Ionian)

w 音の脱落と a 音の e 音への音韻変化

何時音韻変化が生じたのか

ペルシア人の名詞

Mada(Persian)

Madu(Babylonian)

Madai(Hebrew)

Madoi(Cyprus)

Medoi(Ionian)

$\alpha \rightarrow \eta$

前 1000 年頃以降に分化

イオニア方言群の分化

前 1000 年頃に始まる

初期鉄器時代を通じて分化の進行

前 5 世紀に強く意識される

ギリシア語の方言分化は前 1000 年頃から始まる。

コイネーからの分化は東方方言群、特にイオニア方言において著しい。<ペルシア人 (マーダ)、マンダ (バビロニア語)、マードイ (ドーリス方言)、メードイ (イオニア方言)。

母の名詞：マテ (線文字 B)、マーテール (ドーリス方言)、メーテール (イオニア方言)。

ギリシアの外にギリシア語の言語母集団が存在していたのではない。

ギリシアの中に言語母集団が存在していた。

ギリシア語の方言分化は比較的新しい現象であって、鉄器時代に入って生じた。

ドーリス方言がコイネーと呼ばれる母集団の言語に近く、イオニア方言がコイネーからは最も遠い。

従来のように破壊層ばかりに目を向けるのではなく、遺跡の持つ意味を遺跡を含む環境の中で評価し、その意味に変化が生じているのかどうかに注意するべきである。

文化の変化を流行の変化として捉え直すべきである。そうすると文化的変化は連続した

流れの中で生じていることに気がつく。

歴史の連続性

土器の変化

破壊層以前にプロトタイプの出現

破壊層以降も以前の土器が使用される

鉄器

青銅器時代に貴金属として使用

武器としては東方から導入

火葬

時代と社会層による流行

一定の空間の中で人々の移住は認められる：社会や経済のあり方の変化によって中心地への集住と周辺部への分散を繰り返してきた。

集住局面：ヘレニズム～ローマ時代；ビザンツ～トルコ時代；現代。

分散局面：初期青銅器時代；後期青銅器時代；古典期；古代末期～ビザンツ時代；19世紀。

同じような現象はイスラエルの古代遺跡についてもいえる。農村部に分散するか中心としに集まるかの繰り返しであって、アブラハムの民の移動ではない。

しかし余り厳格に考えるべきではない。地中海は太古以来人々の移動の流れの中にあり、様々な集団がギリシアの地を移動していった。前 1200 年頃の黒色磨研土器を制作した集団の移動（ブルガリア→ティリンスやミケーネ→ロドス→キプロス／トロイ）。後 12 世紀のアルバニア人。

DNA 考古学

遺伝子集団の移動による特定タイプの拡散

ギリシア人：Y2 系（セム系）

エトルリア人：Y2 系+E 系（ハム系）

ローマ人：R-S28 系（ステップ系～西ヨーロッパ）

Y 染色体 E1b1b

ギリシア人：26.3、マヨルカ島：18.9、エジプト人：39.9